



Enterprise Strategy Group | Getting to the bigger truth.™

リサーチハイライト

データリーダーシップへの道： 組み込みアナリティクスと包括的な データアナリティクスプラットフォームの導入

Mike Leone、シニアアナリスト

2021年5月

リサーチハイライト/目次

クリックして移動



3

調査の目的・目標



4

組み込みアナリティクスは、
紛れもない価値とビジネス上の
メリットをもたらす



6

組織は引き続き高度な分析機能を備えたデー
タプラットフォームに投資して、目標と継続的課
題の両方に対処しようとしている



10

エンドユーザがデータアナリティクス
プラットフォームにアクセスする頻度と
ビジネスの成功の程度は直接関連している



12

データリーダーはアナリティクスへの
投資に対してより大きな改革を実現している

調査の目的

データチームと開発者は今なおビジネスの要として機能し続けています。増大するデータセットからより迅速、確実に洞察を得ようとした場合につきまとう欠点を解消し続けているのです。データアナリティクスを向上させ、インテリジェンスと顧客に関する洞察をリアルタイムに得られるようにすることは、常にビジネスの優先課題の1つに挙げられており、これが多大なテクノロジー支出を後押ししています。その中で、組織はどのようにしてより多くのエンドユーザーが実際にデータを活用できるようにしているのでしょうか。組織全体でアナリティクスを民主化する上での障壁になっているのは、スキルギャップ、コラボレーション、アクセス性です。そのためデータチームとソフトウェアチームは、データとアナリティクスを活用/利用しやすくするというプレッシャーにさらされています。しかし、今日のビジネスが動的な性質であること、そして優先課題が絶えず変化していることから、シンプルなアナリティクスをタイムリーに提供して利用できないか、精査が進んでいます。その有力な答えになりつつあるのが組み込みアナリティクスです。

ESGでは、このような動向についての洞察を深めるために、北米(米国およびカナダ)の組織に勤務するIT/ビジネス専門家392人に調査を実施しました。対象となった専門家は、包括的なデータアナリティクス/ビジネスインテリジェンスソリューションの評価、購入、管理、構築を自ら手がけています。この調査の目的は、組織がアナリティクスの民主化に対し、どのように優先的に取り組んでいるかを明らかにすることでした。そのために、データチームと開発者の関係がデータ主導型の成功の達成にどのように影響するかについて理解を深めるという方法をとりました。

注:このeBook内の数値や表の合計は、丸め処理の影響で100%にならない場合があります。

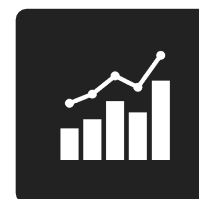
この調査では次のことを目指しました。



アナリティクス/BIの使用状況に基づいて組織の成熟度を判定し、ビジネス上のメリットとの相関関係を明らかにする。




アナリティクスやビジネスインテリジェンスの評価時に組織が最も重視する事柄についての洞察を獲得する。



組み込みアナリティクスを活用しているユーザの影響(メリットや課題など)を調査する。



アナリティクスやビジネスインテリジェンスの購入、活用、サポートに関与しているのは誰かを判断する。



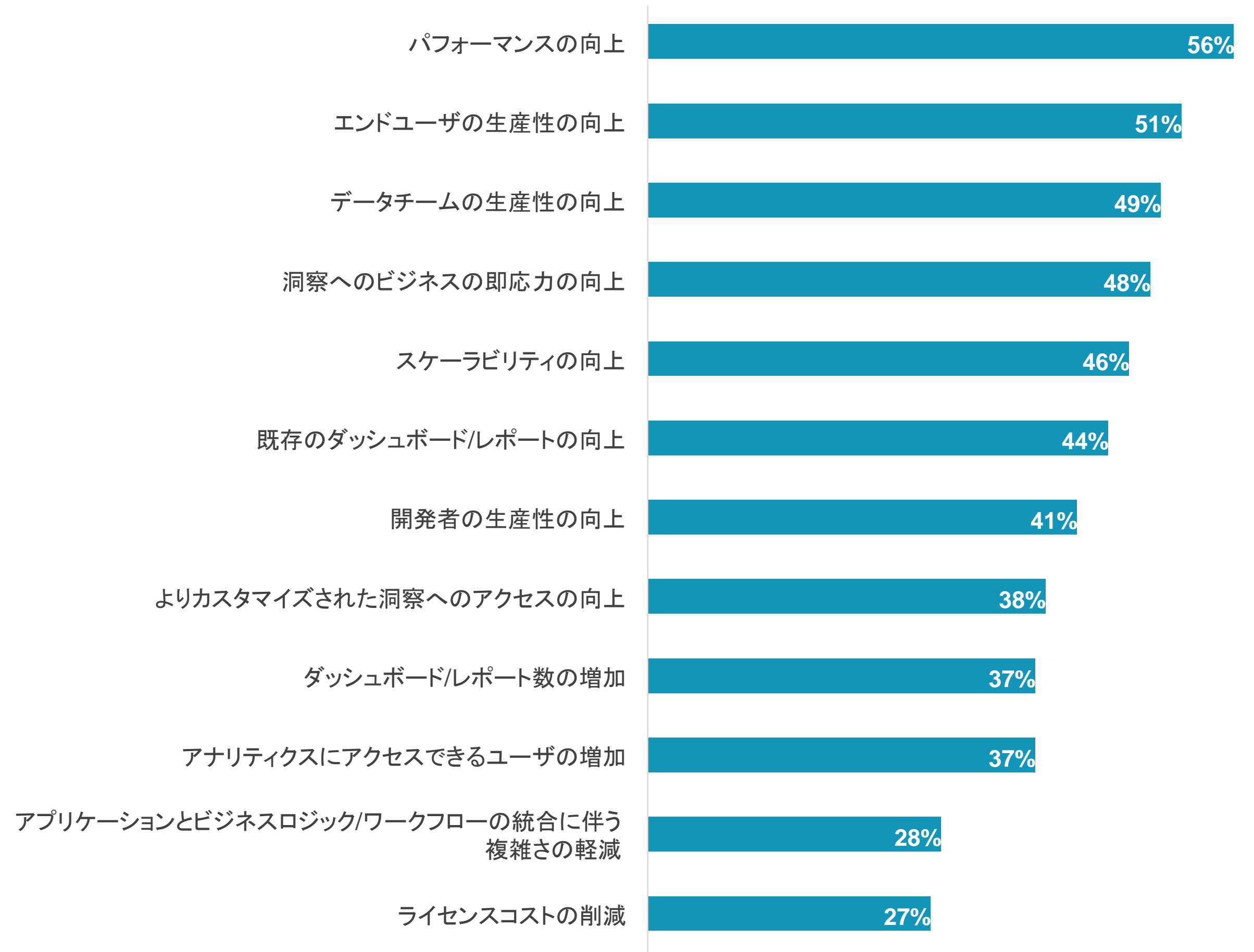
組み込みアナリティクスは、
紛れもない価値とビジネス上の
メリットをもたらす


組み込みアナリティクスの価値

データとアナリティクスを簡単に利用できるようにしてデータチーム、開発者、ビジネス部門の能力を強化する方法を探している組織が組み込みアナリティクスを採用するケースが増えています。組み込みアナリティクスは、BIの特長や機能を組み込んだカスタムアプリケーション内でエンドユーザが簡単にデータを使用、分析、視覚化できる方法として機能します。

組み込みアナリティクスを利用しているユーザは、テクノロジーとペルソナの両方の観点から、ビジネス全体にわたる広範なメリットを実感しています。具体的には、パフォーマンスの向上(56%)、洞察に対するビジネスの即応性向上(48%)、スケーラビリティ(46%)です。これにより、データのライフサイクル全体にわたって、より一貫性と信頼性に優れたエクスペリエンスを提供することが可能になっています。組み込みアナリティクスの開発・使用に関わっている主要ペルソナでは、全般にわたって生産性の向上が見られ、エンドユーザ(51%)、データチーム(49%)、開発者(41%)のそれぞれで職務の効果的な遂行能力が高まっています。

特定のアプリケーション/カスタムアプリケーション内でデータを使用、分析、視覚化するメリット



A man with short brown hair, a beard, and glasses is wearing a light blue blazer over a light blue button-down shirt. He is holding a tablet computer and looking at it intently. The background is a blurred office environment with other people working at desks.

組織は引き続き高度な分析機能を備えた
データプラットフォームに投資して、
目標と継続的課題の両方に対処しようと
している

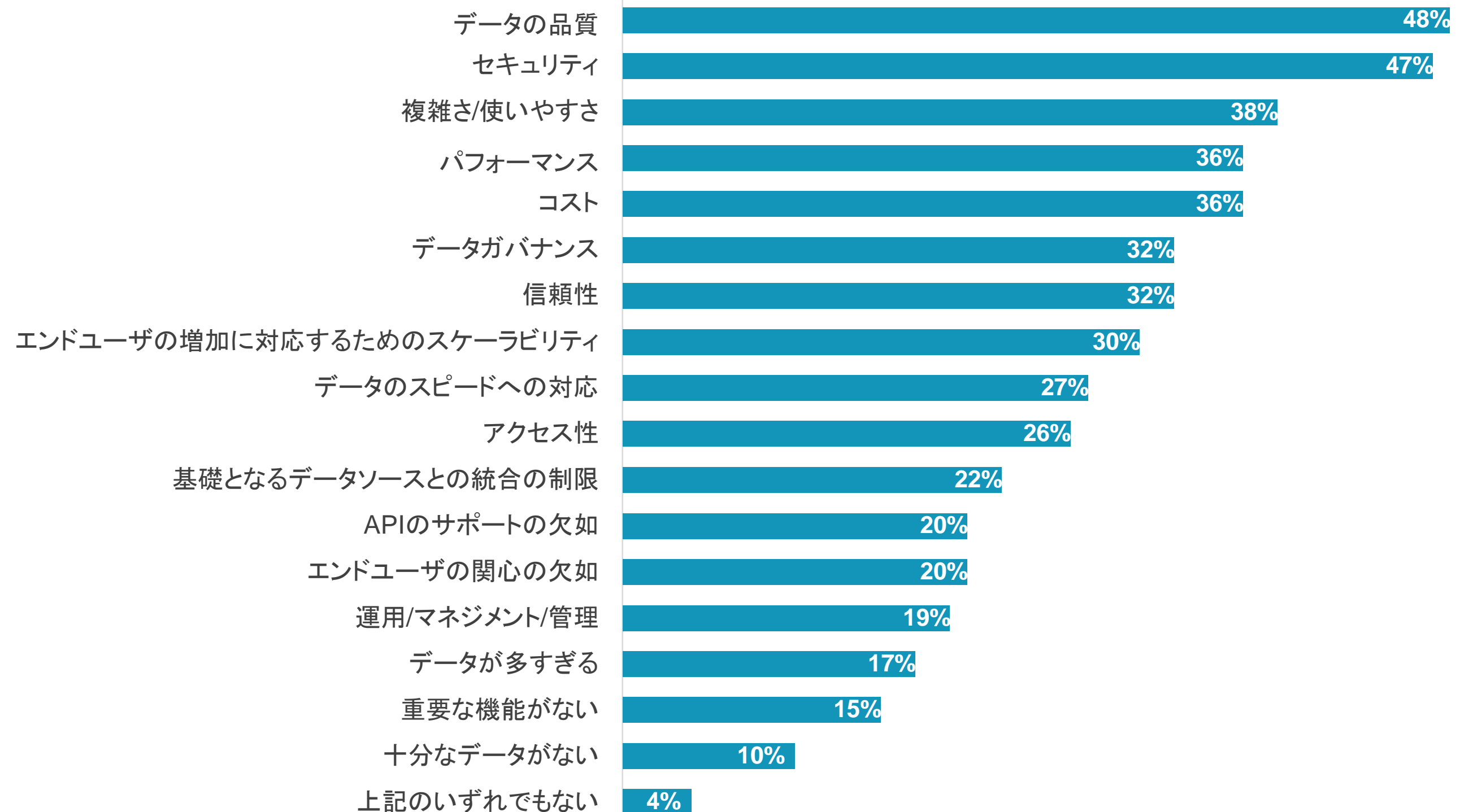
組織は依然としてデータプラットフォームに関連するデータの品質とセキュリティに苦慮している

組織が次のレベルのデータトランスフォーメーションを達成しようと探求を続ける中で、包括的なデータプラットフォームの重要性が高まり続けています。組織の大半が高度なアナリティクスの重要性に同意しており、今後1年間にアナリティクスへの支出を増やすことを予定していますが、課題がいくつか残っています。これらの課題の多くは多様性、規模、分散性というデータの性質に起因するものです。

より多くの人により多くのデータを利用できるようにすることは一見簡単そうですが、データの品質とセキュリティがたちまちリスクになり、信頼を最大限に確保する方法に取り組まざるを得なくなります。その対象はデータそのものにとどまらず、データの統合方法、アクセス方法、分析方法、データへの対応方法にまで及びます。

「これらの課題の多くは多様性、規模、分散性というデータの性質に起因するものです」

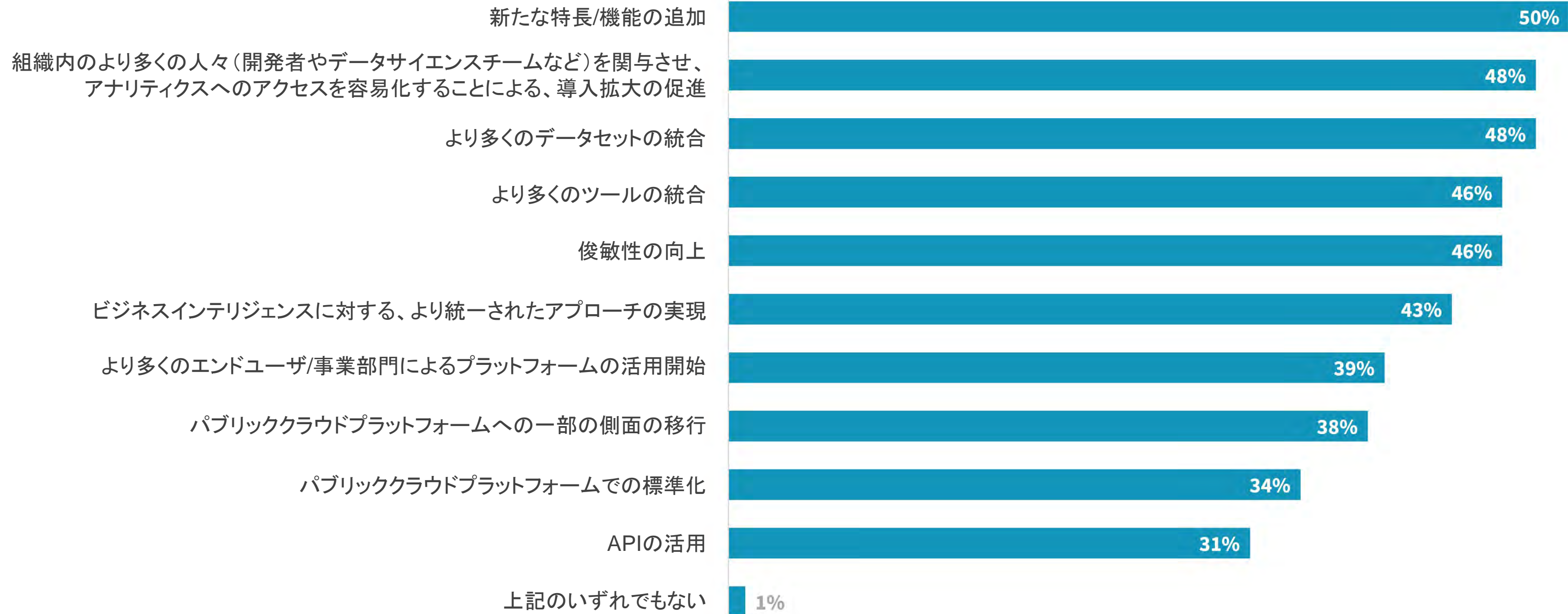
データプラットフォームにおける課題



より多くの機能、より多くの人、より多くのデータ、より多くのツール

バリューチェーン全体へのデータ提供方法という点で、組織は急速に進化しており、新たな特長や機能への投資が進んでいます。また、ビジネス全体でより多くのペルソナを関与させて、データファーストのMindsetの導入を促進しています。さらに、エンドユーザが自在にデータにアクセスしてデータを利用できるよう、より多くのデータやツールを統合しています。こうした変化の根底にあるのは、多くの場合、シンプルさとセルフサービスです。これによってエキスパートとジェネラリストの能力を等しく強化し、負担軽減と生産性向上を図っています。

データ分析プラットフォームに関して組織が今後1年間に達成を見込んでいる変化

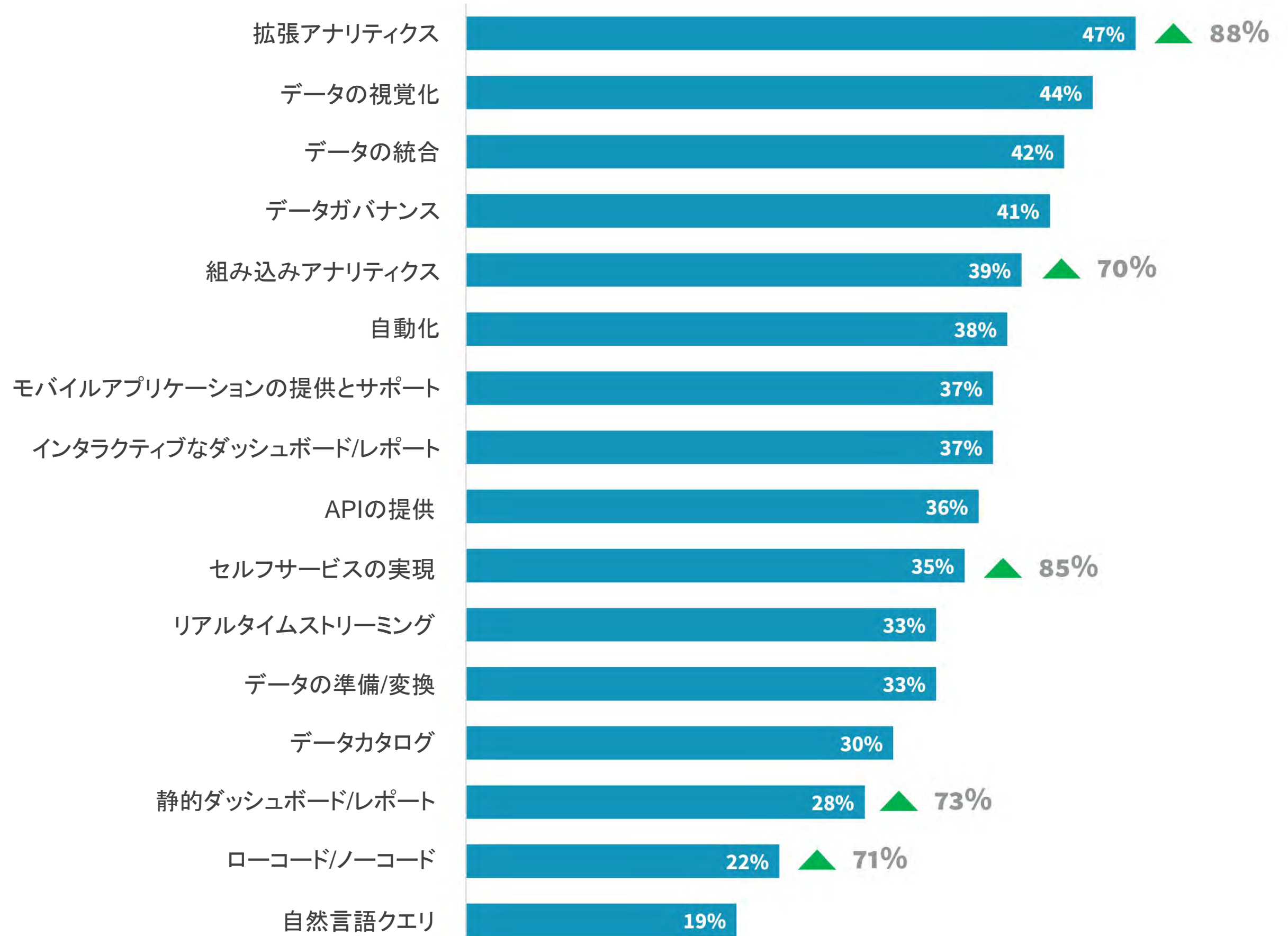


アナリティクス導入リストの 次の項目は何か

多くの企業では、アナリティクス/BIプラットフォームに関連する従来の機能（データ統合、データ視覚化、データの準備/変換、データガバナンスなど）はすでに導入済みですが、従来の機能と高度な機能の両方の導入が爆発的増加を続けています。拡張アナリティクスはデータアナリティクスのアプローチの1つで、機械学習と自然言語処理を活用することで、通常はスペシャリストやデータサイエンティストが行う分析プロセスを自動化します。拡張アナリティクスは今後1年間で最大の成長が見込まれますが、包括的なデータプラットフォームに初めて触れるジェネラリストが増えるにつれて、セルフサービスの実現や静的ダッシュボード/レポートなどの領域も大きな成長を見せると予想されています。この他に使用の大幅な増加が見込まれる領域のトップ5には、組み込みアナリティクスとローコード/ノーコード機能が含まれます。

組織が今後1年間に投資を計画している、データ分析プラットフォームやビジネスインテリジェンスをサポートするための新機能

▲ 大きな成長が見込まれる領域



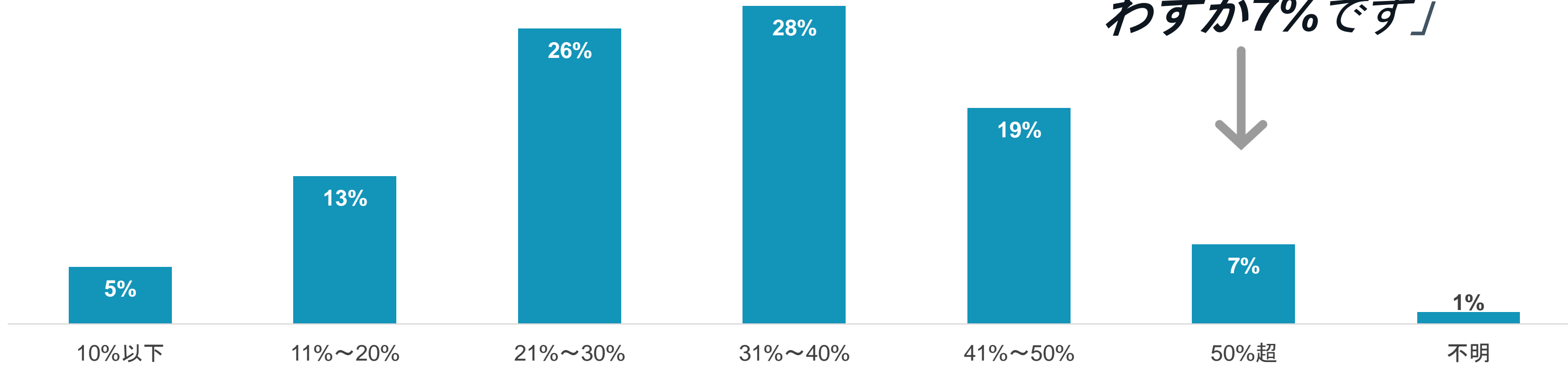
エンドユーザがデータアナリティクス
プラットフォームにアクセスする
頻度とビジネスの成功の程度は
直接相関している



データ分析プラットフォームへのアクセス性だけが問題なのではない

データアクセスを増やす機会があることは明らかです。これを裏付けるように、従業員の半数以上がデータアナリティクス/BIプラットフォームにアクセスできると答えた組織はわずか7%にすぎません。組織は、より多くのエンドユーザーにユーザ名とパスワードを与えて手っ取り早く済まそうとしますが、適切なトレーニング、サポート、動機を欠いたままプラットフォームを使用しても、期待したほどの成果が得られるはずはありません。プラットフォームへのアクセス性は重要ですが、同じように重要なのはプラットフォームにアクセスする頻度です。この頻度によってスキルが磨かれ、データリテラシーが高まり、同僚とのコラボレーションによってビジネスが向上するからです。組織内のより多くの人々がアナリティクスを利用できるようにするには、プラットフォームを優先します。どのようなプラットフォームが良いかと言うと、ビジネスユーザーがデータを思いどおりに調査、操作できると同時に、インテリジェンスと不可欠のガードレールが組み込まれたプラットフォームです。

データアナリティクス/BIプラットフォームにアクセスできる従業員の比率



従業員半数以上がデータアナリティクス/BIプラットフォームにアクセスできると答えた組織はわずか7%です」

データリーダーは、
アナリティクスへの
投資に対してより大きな
改革を実現している



アナリティクスとBIのセグメンテーションモデル

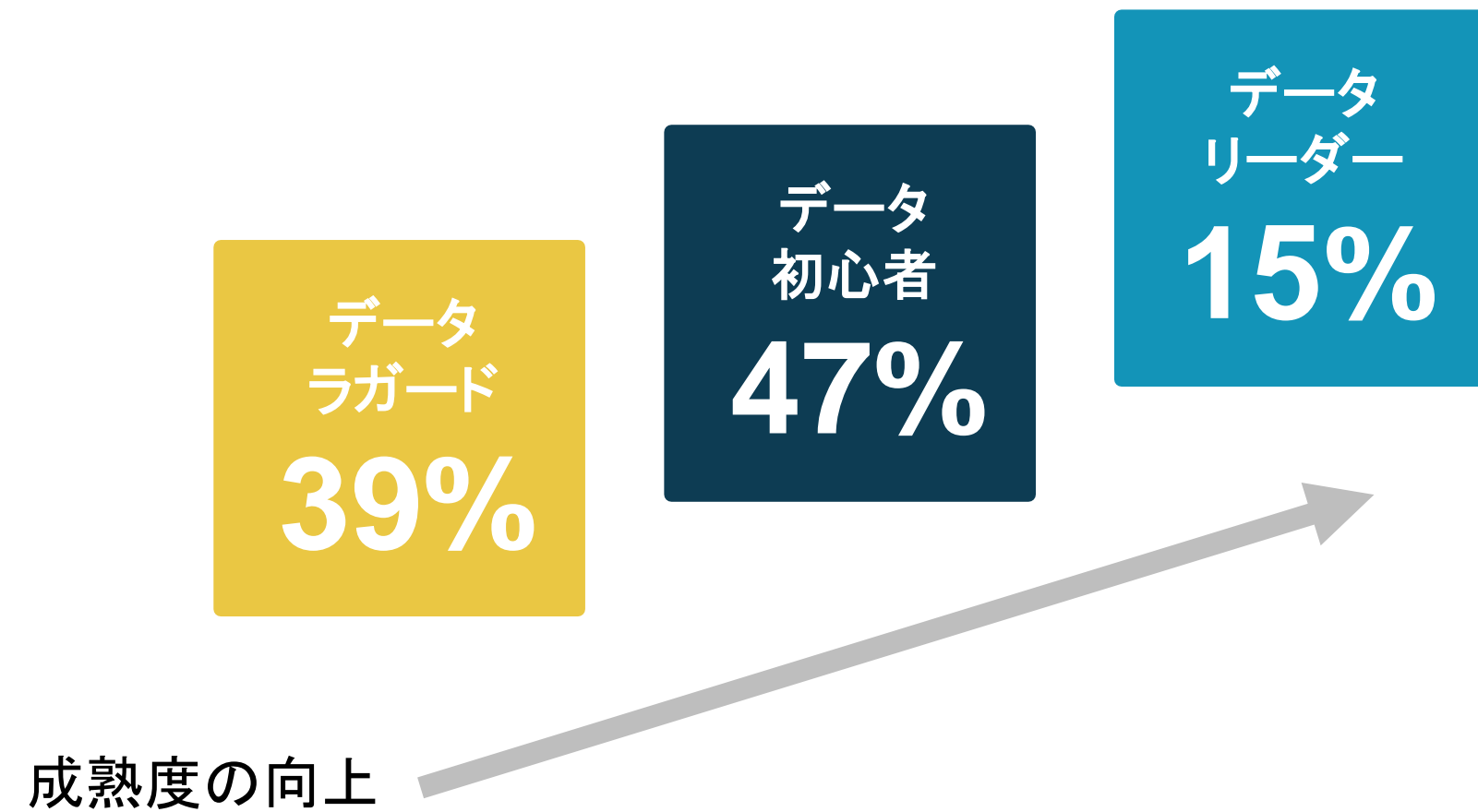
ESGはビジネスインテリジェンスのセグメンテーションモデルを作成し、組織内でのアナリティクスとBIの浸透度に関連する5つの質問を尋ね、その回答に基づいて回答者を3つの成熟度段階のいずれかに分類しました。ここではポイント制のスコアシステムを採用し、行動や属性が高度なデータ戦略およびビジネス全体へのビジネスインテリジェンスの浸透度に合致しているほど、高いポイント値を付与しています。評価対象となる領域は、高度な機能の使用状況、セルフサービス機能の利用可否、データチームと開発者の対話のレベル、ユーザによるデータの使用、分析、視覚化の方法などです。回答者は合計で最大21ポイントを獲得ことができ、成熟度の各段階のブレイクポイントは次のように設定しています。

- データラガード(遅滞者): 7ポイント以下のスコア
- データ初心者: 8~13ポイントのスコア
- データリーダー: 14ポイント以上のスコア

質問:

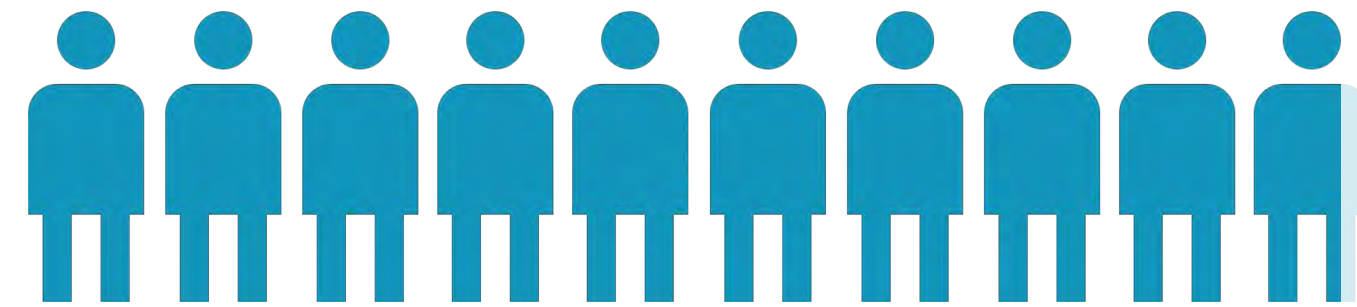
<p>要素: BIセルフサービスの使用状況</p> <p>メトリック: BIプラットフォームのセルフサービス機能を利用しているユーザの数</p>	<p>要素: データチームと開発者の対話</p> <p>メトリック: データチームと開発者間の対話の頻度</p>	<p>要素: BIダッシュボードのインタラクティブ性</p> <p>メトリック: 完全にインタラクティブなBIダッシュボードとレポートの数</p>	<p>要素: データの使用方法</p> <p>メトリック: ユーザによるデータの使用、分析、視覚化の方法</p>	<p>要素: 高度なBI機能の使用状況</p> <p>メトリック: 使用している高度なBI機能の総数</p>
--	--	---	--	--

成熟度段階別の回答組織の比率



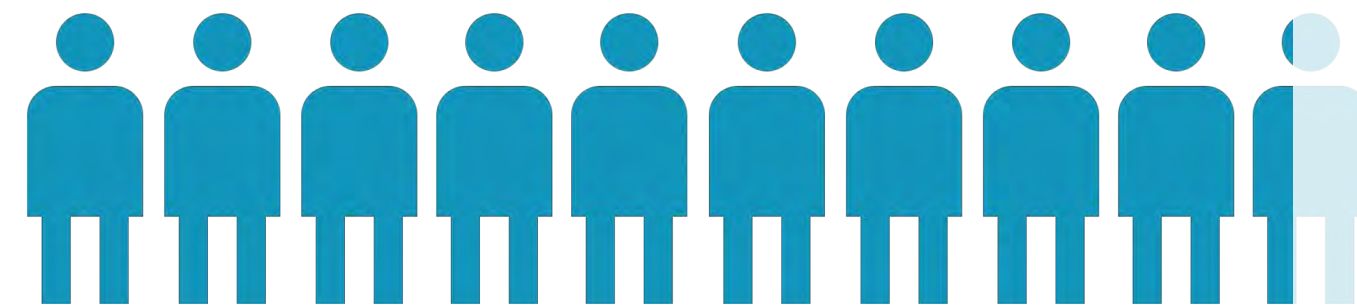


データリーダーとデータラガードのギャップ



98%

アナリティクス/ビジネスインテリジェンスへの支出を増やす予定のデータリーダーの割合



93%

アナリティクス/ビジネスインテリジェンスをほとんどまたはすべての事業部門で広く使用している割合



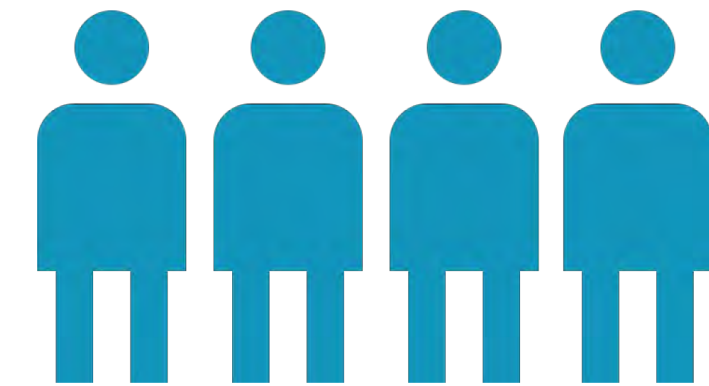
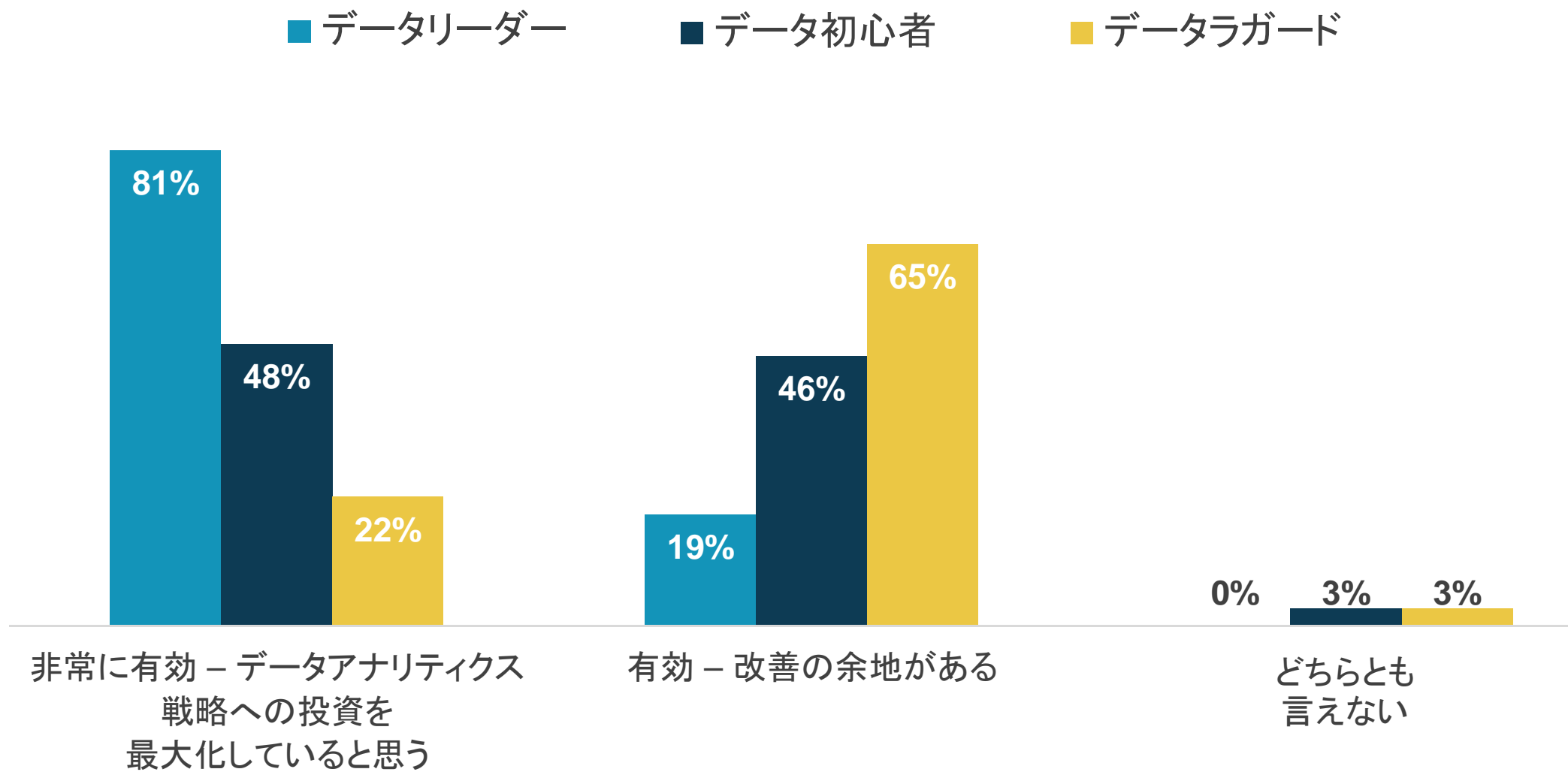
確率3.5倍

はるかに多くの人々が購入決定に関与している確率が高い
(データラガードとの比較)

データリーダーはデータ戦略への投資を最大限に活用している

より大きな価値の創出を目的として引き続きビジネスインテリジェンスへの投資が行われていますが、データリーダーとその他を分ける重要なメトリックの1つとして、投資の最大化の有効度があります。事実、自社で進行中のアナリティクス戦略への投資を非常に有効に最大化していると考えているデータリーダーの確率は、データラガードのほぼ4倍に上ります。

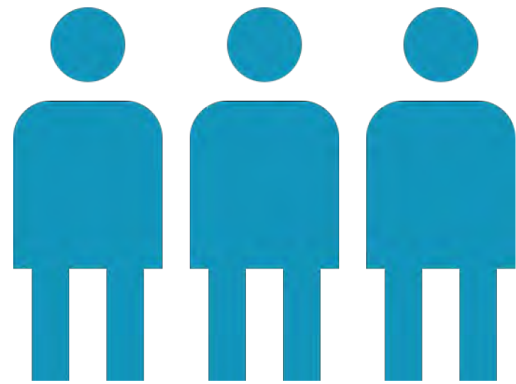
| ビジネスの価値を推進する上でのビジネスインテリジェンス環境の有効性



自社で進行中のアナリティクス戦略への投資を非常に有効に最大化していると考えているデータリーダーの確率は、データラガードのほぼ4倍に上ります」

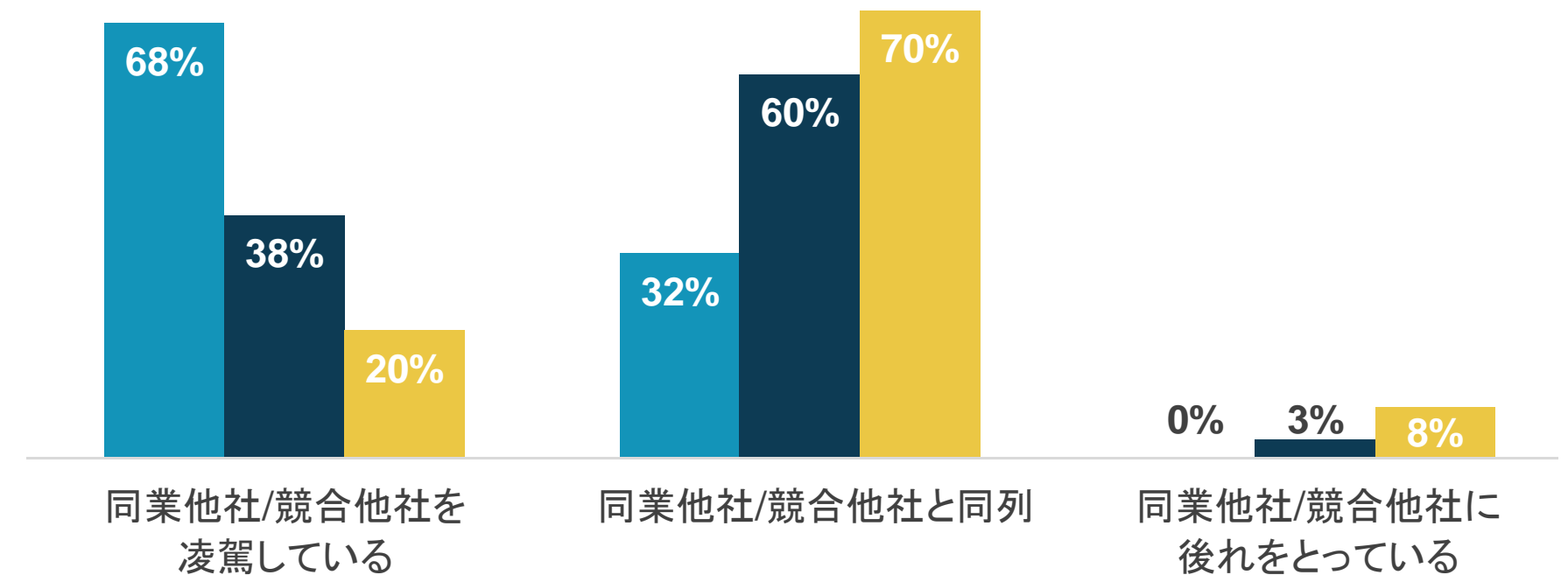
データリーダーは競合他社を凌駕していると考えている

データは競争上の差別化要因となることがわかっています。組織が引き続きデータ中心の取り組みを重視する中で、アナリティクス/BIプラットフォームから得た洞察を活用してもたらされる価値によって、データリーダーは他をさらに引き離すことが明らかになっています。事実、各市場で自社が同業他社や競合他社を凌駕していると考えているデータリーダーの確率は、データラガードの3倍以上に上ります。



アナリティクスやBIから得た洞察の活用に関して、同業他社や競合他社と比較して自組織のことをどのように考えているか

■ データリーダー ■ データ初心者 ■ データラガード

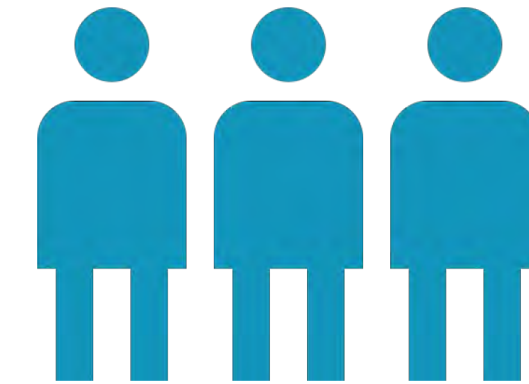
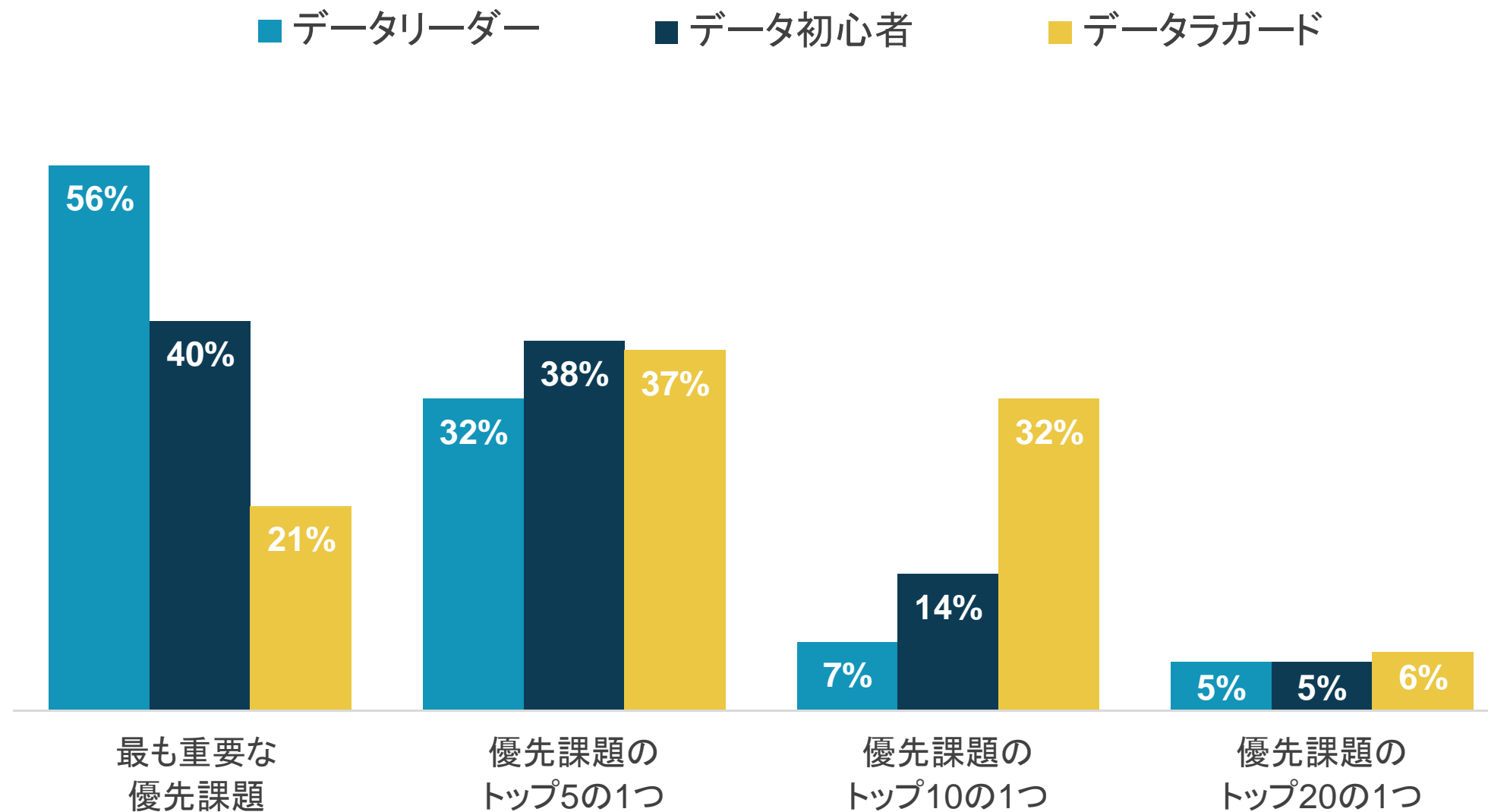


各市場で自社が同業他社や競合他社を凌駕していると考えているデータリーダーの確率は、データラガードの3倍以上に上ります」

データリーダーはデータアナリティクス/ビジネスインテリジェンスのプロジェクトと取り組みを優先している

ビジネスの優先課題について挙げると長大なリストになります。組織は、セールス、マーケティング、トレーニングに投資して、新たな市場への参入、新製品の開発、チームの育成を促進しようとするでしょう。また、継続的に新たなテクノロジーを導入し、デジタルトランスフォーメーションのさらなる推進も図るでしょう。このようにビジネス上のさまざまな優先課題の中でも、データリーダーの大半が最も重要なビジネス上の優先課題として挙げているのが、アナリティクス/ビジネスインテリジェンスのプロジェクトと取り組みです。具体的に言うと、アナリティクスとビジネスインテリジェンスを最も重要なビジネス上の優先課題と見なしているデータリーダーの確率は、データラガードのほぼ3倍に上ります。しかし、データリーダーが現在の地位に甘んじることはありません。データリーダーは、既存のアナリティクス/BIへの投資から効果を上げていますが、引き続き、より多くの人により多くのデータを使用してビジネス上の適切な決定を適時に下せるようにするための機会があると考えています。

| アナリティクス/ビジネスインテリジェンスのプロジェクトと取り組みの重要性



「アナリティクスとビジネスインテリジェンスを最も重要なビジネス上の優先課題と見なしているデータリーダーの確率は、データラガードのほぼ3倍に上ります」



1978年創立のインターシステムズは、重要な情報ニーズを持つヘルスケア、金融、サプライチェーンなどの分野の組織に革新的なデータソリューションを提供しています。インターシステムズのクラウドファーストデータプラットフォームは、世界中の組織の相互運用性、スピード、スケーラビリティの問題を解決します。また、世界で最も定評ある電子医療記録によって病院のデータ管理を開発、サポートするとともに、強力なヘルスケアデータ統合ソリューションスイートによって医療システムや行政機関向けの統合診療記録の開発、サポートも手がけています。80か国以上のお客様とパートナーに、定評ある年中無休(24×7)のサポートを提供し、卓越したサービスの提供に尽力しています。インターシステムズは、マサチューセッツ州ケンブリッジに本社を置く株式非公開企業であり、全世界に25のオフィスを構えています。

詳細情報

ESGについて

Enterprise Strategy Groupは、テクノロジーに関する分析、調査、戦略の総合企業として、グローバルなテクノロジーコミュニティに市場情報、実用的な洞察、市場参入のためのコンテンツサービスを提供しています。

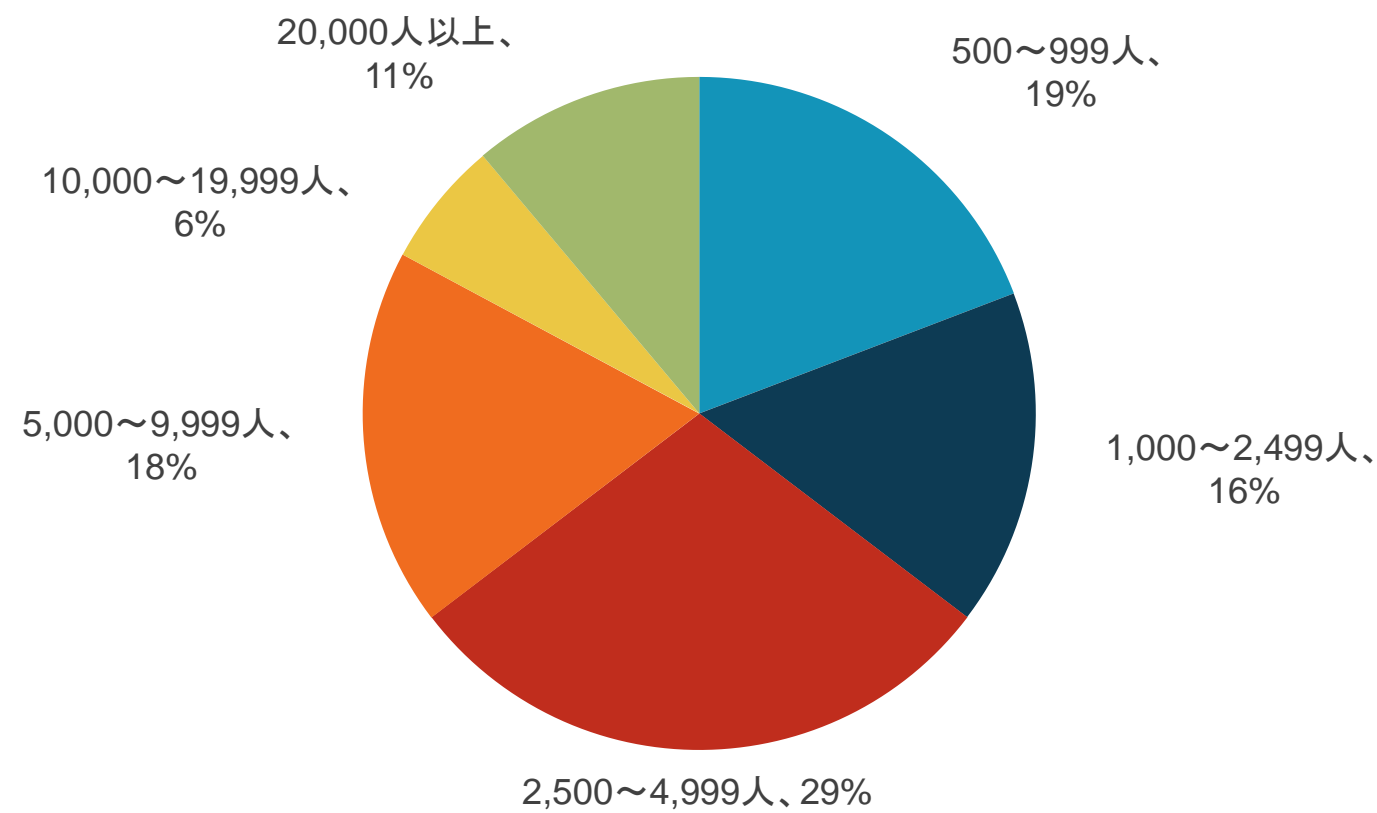


調査方法

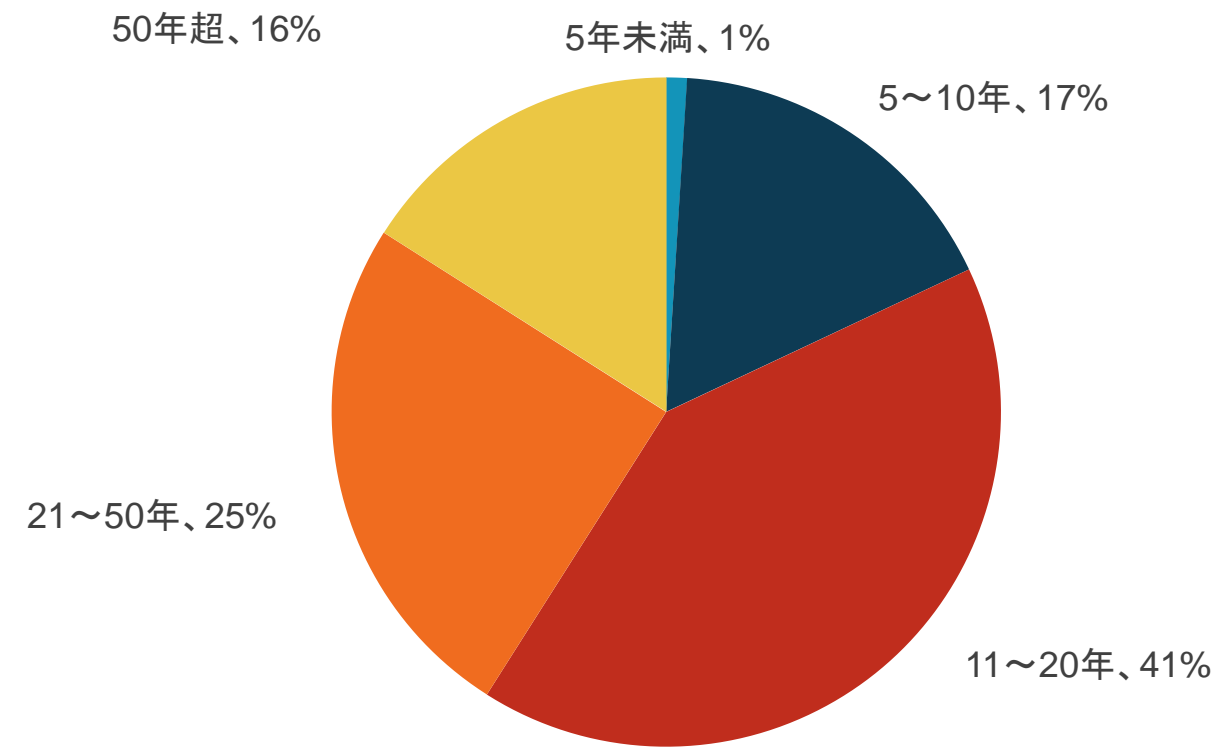
このレポートのデータを収集するために、ESGは2021年2月18日から2021年2月28日にかけて、北米（米国とカナダ）の民間および公共部門の組織に勤めるITとビジネスの専門家を対象に包括的なオンライン調査を実施しました。この調査では、ビジネスインテリジェンスソリューションの評価、購入、管理、構築を自ら担当しているITまたはビジネス専門家であることを回答者の条件としました。調査への回答の報酬として、すべての回答者に現金または現金同等物を提供しました。

条件を満たしていない回答者を除外し、重複する回答を取り除き、その後残りの回答を（多くの基準で）スクリーニングしてデータの完全性を確認しました。その結果、最終的に合計でITおよびビジネス専門家392人のサンプルが得られました。

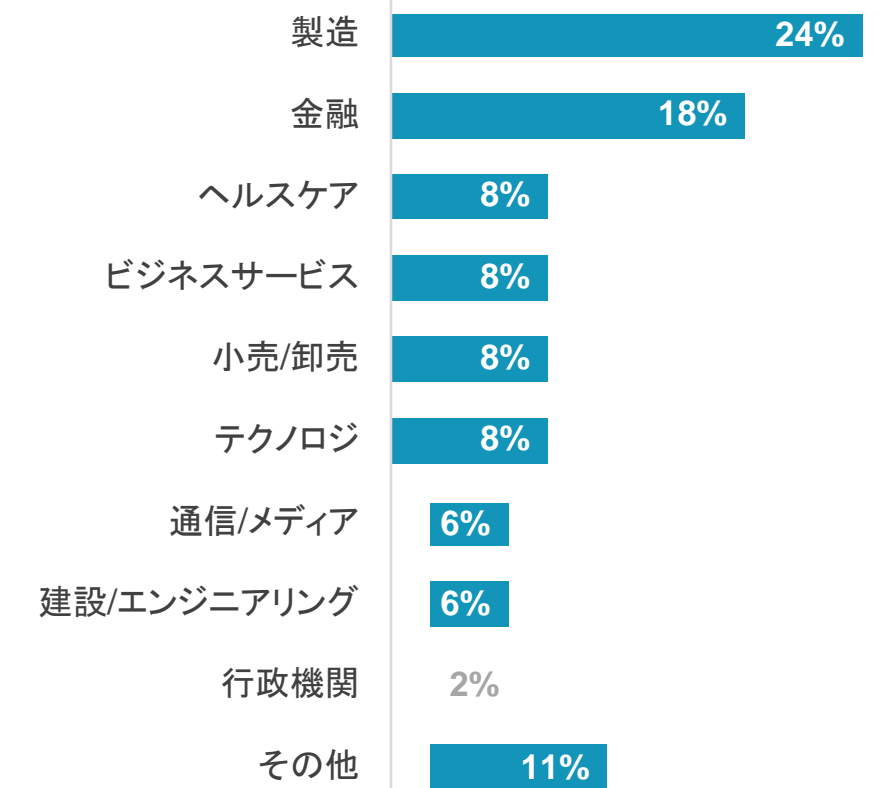
従業員数別の回答者の割合



会社の操業年数別の回答者の割合



業種別の回答者の割合



すべての製品名、ロゴ、ブランド、および商標は、それぞれの所有者に帰属します。本出版物に記載されている情報は、TechTarget, Inc.が信頼できると判断した出典から取得したものです。TechTarget, Inc.は出典に関する保証はいたしません。本出版物はTechTarget, Inc.の見解を含んでいる場合があります。その見解は変わることがあります。本出版物は、現在利用可能な情報を踏まえたTechTarget, Inc.の仮定や期待が表す予測、予想、またはその他の予測的記述を含む場合があります。これらの予測は業界の動向に基づくものであり、可変要素や不確実性を含んでいます。したがって、TechTarget, Inc.は、ここに記載されている特定の予測、予想、予測的記述の正確性についてはいかなる保証もいたしません。

本出版物の著作権はTechTarget, Inc.が所有しています。TechTarget, Inc.の明示的な同意なしに、印刷物、電子形態、またはその他の方法により、本出版物の全部または一部の複製や、受領する権限のない者への再配布を行った場合、米国著作権法違反として、民事損害賠償訴訟の対象となり、該当する場合は刑事訴追の対象となります。ご不明な点は、お客様対応(Client Relations)部門(cr@esg-global.com)までお問い合わせください。



Enterprise Strategy Groupは、テクノロジーに関する分析、調査、戦略の総合企業として、グローバルなテクノロジーコミュニティに市場情報、実用的な洞察、市場参入のためのコンテンツサービスを提供しています。

© 2021 TechTarget, Inc. All Rights Reserved.